

特集「オープンソース時代の分散システム/インターネットの構築・運用技術」の編集にあたって

藤 村 直 美†

日本で初めてインターネットが稼働し始めた 1988 年からほぼ 17 年が経過した。この間の広域コンピュータネットワークとしてのインターネットと各組織内のローカルエリアネットワークの発展には目を見張るものがある。また、ホストコンピュータとそれに接続された端末ですべての処理が行われていた、かつての集中処理から、認証サーバ、メールサーバ、WWW サーバ、プリントサーバなど、各種の機能をそれぞれのコンピュータが分担して処理する分散処理が現在では当たり前になっている。

こうしたコンピュータやネットワークで使用するソフトウェアも、ハードウェアを提供しているコンピュータメーカー独自のソフトウェアに依存していた時代から、オープンソースと呼ばれる、世界中の有志によって協調開発され、利用や再配布に制約がない、高機能で高品質なソフトウェアが広く使用されるようになってきた。GNU プロジェクトによるソフトウェアや Linux などはその代表的なものであろう。そのほか、優れたデザインのソフトウェアが流通するようになっている。

企業や大学などの組織においても、コンピュータとネットワークの使用形態は激変し、その重要性は増すばかりである。コンピュータとネットワークの管理・運用関係者は「正常に動いて当然」と思われていて、正常に動作している限りは注目されないコンピュータシステムやネットワークシステムの日々の管理・運用に多大の時間と労力を割いている。さらに、新しい技術の進歩・発展に追従し、また自らが新しい技術開発や提案をしていかなければならない。

そうした状況の中で、本特集では、分散システム/インターネットの構築・運用に関する研究成果を掘り起こして知識・経験を共有するとともに、本分野の研究の推進と発展に寄与することを目的とした。特集のタイトルは「オープンソース時代の分散システム/インターネットの構築・運用技術」であるが、必ずしもオープンソースに関連する論文に限定するものではなく、本分野に関連する論文を幅広く対象とした。

最終的に、本特集では 33 編の論文が投稿された。これらの投稿論文を 21 名からなる特集号編集委員会により、通常の論文査読と同じメタレビュー方式で査読を行った。その結果、最終的に 14 編の論文を採録することとなった。採択率としては 42% となり、かなり厳しい内容となった。査読の経過を振り替えて見ると、投稿された論文に新規性や有用性は認められるものの、構成や議論の進め方に問題があるために不採録となった論文が多かった。手っ取り早く業績をあげたい事情も分からないではないが、研究成果として論文を投稿する際には、内容や構成を良く吟味し、「良い成果」を「良い論文」として世に問うて欲しい。

最後に本特集号をゲストエディタ制により企画する機会をいただいた論文誌編集委員会と優れた多数の論文を投稿していただいた方々に感謝したい。また多数の論文を短時間で迅速に査読していただいた査読者各位、ならびに多くの作業にご協力いただいた学会事務局に感謝する。

「オープンソース時代の分散システム/インターネットの構築・運用技術」特集編集委員会

- 編集長
藤村直美（九州大学）
- 編集委員
相原玲二（広島大）、渥美幸雄（専修大）、一井信吾（東京大）、今泉貴史（千葉大）、菊池 豊（高知工科大）、齊藤明紀（鳥取環境大学）、齊藤梅朗（会津大）、中川郁夫（インテック・ネットコア）、中村 眞（シャープ）、萩原洋一（東京農工大）、箱崎勝也（電通大）、長谷川明生（中京大）、藤崎智宏（日本電信電話）、樋地正浩（日立東日本ソリューションズ）、牧野 晋（麗澤大）、松浦敏雄（大阪市立大）、宮地利雄（日本電気）、渡辺健次（佐賀大）、山井成良（岡山大）、山之上卓（鹿児島大）

† 九州大学大学院芸術工学研究院